
国際シンポジウム

人文学の再建とテキストの読み方—津田左右吉をめぐる—

主催 早稲田大学総合人文科学研究センター (RILAS)

共催 私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生」第三研究グループ「早稲田大学と東アジア—人文学の再生に向かって—」／スーパーグローバル大学創成支援事業・国際日本学拠点／角田柳作記念国際日本学研究所

- 日時 2017年1月14日(土)
- 会場 早稲田大学小野記念講堂
- 趣旨

世界的な規模における人文学の危機を踏まえ、その再生の試みの一環として津田左右吉の人文学形成とその課題を再検討したい。そして、人文学の基盤とも言えるテキストの読み方をめぐり、様々な観点から問題提起をおこないたい。

プログラム：

〈総合司会〉河野 貴美子 (早稲田大学)

11:00 開会の挨拶：大藪泰 (早稲田大学 文学学術院長)

趣旨説明：新川登亀男 (早稲田大学)

11:15～11:55 プロローグ

「津田左右吉の文献学と儒学的合理主義—人文学的批評はいかにして可能になるか—」

磯前 順一 (国際日本文化研究センター)

13:00～15:00 第一部 解釈と再生

13:00～13:40 「津田左右吉と神話学—『ヨミの国の物語』を中心に—」

デイヴィッド・ルーリー (コロンビア大学)

13:40～14:20 「中国古典と津田左右吉」

渡邊 義浩 (早稲田大学)

14:20～15:00 「津田左右吉の国民思想研究における仏教芸術観」

肥田 路美 (早稲田大学)

15:10～17:10 第二部 知の交差

15:10～15:50 「白鳥庫吉と津田左右吉」

マシュー・フェルト (コロンビア大学)

15:50～16:30 「岩波茂雄と津田左右吉」

十重田 裕一、塩野 加織、尾崎 名津子 (早稲田大学)

16:30～17:10 「柳田民俗学と津田左右吉」

鶴見 太郎（早稲田大学）

17:20～18:10 第三部 総合討論（講演者全員）

司会：新川 登亀男（早稲田大学）

18:10 閉会の挨拶：上野 和昭（早稲田大学 総合人文科学研究センター 所長）



国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方—津田左右吉をめぐる—」を終えて

新川登亀男（文学学術院教授、コーディネーター）

2017年1月14日（土）、早稲田大学小野記念講堂において、早稲田大学総合人文科学研究センター（RILAS）主催の年次フォーラムである国際シンポジウム「人文学の再建とテキストの読み方—津田左右吉をめぐる—」が開催された。本シンポジウムは、上記研究センターの部門研究である「仏教文明と東アジアの地域文化研究」を基盤としておこなわれた。そして、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生」第三研究グループ「早稲田大学と東アジア—人文学の再生に向かって—」、スーパーグローバル大学創成支援事業・国際日本学拠点、角田柳作記念国際日本学研究所の後援を得た。シンポジウム当日には、約150名に及ぶ方々にご参集いただいた。とくに早稲田大学以外の諸大学や諸機関から多くの方々にお越しいただいたことは、人文学の現状に対する関心の広さと深さを物語るものであろう。ご協力いただいた関係各位に感謝したい。

本シンポジウムは、近年問題視されている「人文学の危機」現象をとりあげ、「人文学の

危機」がどこにあるのか。それをどのように克服したらよいかを模索する意図のもとで開催された。しかし、「人文学の危機」という課題は大きなものであり、その捉え方も一様ではないと考えられる。そこで、具体的な事例を手がかりにして考えてみる方法を選んだ。すなわち、津田左右吉（1873-1961）が構築しようとした「学問」とは何であったのか。その企図と方法と成果をどのように問い直したらよいか。そして、そこから人文学のあり方を再考し、模索する手がかりを得たいと考えたのである。津田の自称「学問」は、旧満鮮歴史地理研究、日本の記紀研究、国民思想研究、中国古典思想研究、そして教育論、歴史論など多岐にわたるものであり、近代の人文学形成の一例として取り上げるに値するであろう。

しかし、本シンポジウムは津田左右吉の業績を称賛するものではない。津田の「学問」に倣うことが、そのまま「人文学の危機」を乗り越え、人文学の再建を直接導くことになると認識しているわけでもない。津田の「学問」総体を多角的かつ客観的に見直し、また、それぞれの視角を相互に公開し、かつ交換することを通じて、人文学の再建をめざす着実な一歩にしたいと望んだのである。その意味においては、一定の理念を前提とした問題提起に収斂させるのではなく、多様にして具体的な見方を突き合わせてみるという、いわば原初的な基盤の確認を心がけたつもりである。その大綱は、以下のとおりである。

プロローグとして、磯前順一氏（国際日本文化研究センター）の「津田左右吉の文献学と儒学的合理主義—人文学的批評はいかにして可能になるか—」が報告された。この報告は、エドワード・サイードの「人文学的批評」を念頭におきながら、津田の国民文学論、記紀論、文献学、戦後歴史学とのかかわりを柱として取り上げた。そして、言語文化と非概念的世界の差異と関係、帝国主義と民族国家論、儒学と国学、歴史とテキストとの逆転関係、その他多くの課題や概念を提起し、合わせて数多の人文学者との突き合せを試みている。

これにつづく第一部「解釈と再生」では、津田左右吉がテキストをいかに読み、そしてそれをどのように再生させたのかを様々な視点から具体的にさぐり、その意味や限界を明らかにしようとした。

第一に、デイヴィッド・ルーリー氏（コ



ロンビア大学、ドナルド・キーン日本文化センター所長)の「津田左右吉と神話学—『ヨミの国の物語』を中心に—」が報告された。この報告では、現今(当時)の神代史研究と比較神話学を批判する津田が、記紀の「ヨミの国」物語をいかに読んだのかを追究し、津田自身の神話学を想定する。

第二に、渡邊義浩氏(早稲田大学)の「中国古典と津田左右吉」が報告された。この報告では、津田の中国古典研究が清朝考証学とも、既存の中国思想への認識とも異なる徹底的な史料批判(主体的な近代合理主義)によってなされたことを読み解いてみせた。具体的には、津田がおこなった『論語』成立論を武内義雄のそれと対比させながら追究し、現在の出土文字資料研究との関係に及ぶ。



第三に、肥田路美氏(早稲田大学)の「津田左右吉の国民思想研究における仏教芸術観」が報告された。この報告では、津田の仏教芸術批判を取り上げた。津田は「貴族文学時代」の仏教芸術が「支那芸術の模本」であり、「日本人の宗教的感情の表現」ではないと主張したが、これに対して、中国からの模倣にも選択や排除があったことを具体的に指摘する。一方で、日本の仏教芸術の源流を中国南朝に求めた津田の理解を評価した。



以上、三者の報告は、日本の古典(文字資料)、中国の古典(文字資料)、そして日本の仏教芸術(非文字資料)を津田がいかに読んだのかを実証的に明かしたものである。同時に、それぞれの報告者自身によるテキストの読み方が開陳されており、津田のテキストの読み方と、現在における三者のテキストの読み方との緊張関係も読み取れる。これからは、津田のテキスト読みを媒介として、現在の三者のテキスト読みをどのように繋ぎあわせて、あらたな人文学への展望を拓くのが望まれるであろう。その際、テキスト読みの基底や背景に存在する、狭義の研究や学説を越えた諸課題や概念との擦り合わせも必要となろう。つまり、磯前報告との交換関係が期待されるのである。

第二部「知の交差」では、津田と他者との交流を通じて、津田の人文学の位置づけを試みた。

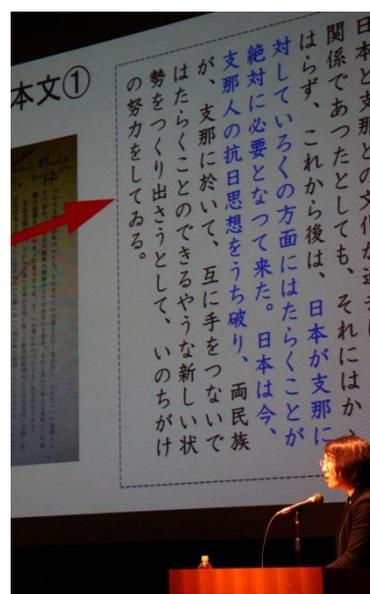
第一に、マシュー・フェルト氏（コロンビア大学）の「白鳥庫吉と津田左右吉」が報告された。この報告では、津田が永年にわたって私淑した東洋学者の白鳥庫吉（1865-1942）と津田自身との間で、日本の神代史および神話に関する理解がどの部分で共通し、どの部分で異なっていたのかを追究し、民族・人種論に及んだ。



第二に、十重田裕一・尾崎名津子・塩野加織諸氏（以上、早稲田大学）の「津田左右吉と岩波茂雄」が報告された。この共同報告では、まず、岩波書店所蔵などの岩波



茂雄（1881-1946）関係資料調査にもとづき、いわゆる津田事件と岩波茂雄との関わり方や内務省検閲について新資料を紹介する。ついで、ゴードン・W・ブラング文庫所蔵資料（アメリカのメリーランド大学蔵）調査にもとづき、津田の著『支那思想と日本』（岩波新書）の再版時における戦後占領期の検閲と津田の対応について新資料を紹介した。



第三に、鶴見太郎氏（早稲田大学）の「柳田民俗学と津田左右吉」が報告された。この報告では、柳田国男（1875-1962）らが主宰する『郷土研究』や『民族』に寄稿した津田と

柳田との諸関係を明らかにした。そして、民謡や役行者説話などの理解にみられる両者の大きな差異点に注目する。

以上、三者の報告は、津田との交流がよく知られていた白鳥庫吉、岩波茂雄、また逆に、津田との交流がよく知られていたとは言い難い柳田国男の三者を取り上げ、文字通り津田との「知の交差」に焦点をあてたものである。その結果、津田の人文形成とそれぞれ三者（白鳥・



岩波・柳田）とがどのような共振関係を結び、また逆に、いかなる差異を鮮明にしたのかが浮き彫りにされてきた。合わせて、近代日本国家の構築とともに歩んできた人文の形成に、どのような課題と問題点があったのかを、三者の報告は問いかけていよう。

第三部「総合討論」では、報告者がそれぞれの報告について補い合い、会場からの質問に応えた。その質問のなかには、これまでの津田研究の限界を指摘するものや、本シンポジウムの趣旨を確認するものなどがあり、率直かつ活発な意見交換がなされた。



本シンポジウムは、まさに盛況のうちに幕を閉じた。力のこもったそれぞれの報告に感謝するとともに、本シンポジウムが、さらに人文のあり方について広く問いかけていく貴重な一歩になることを望んで止まない。



(文責：新川登亀男)